

李白の「峨眉山月の歌」と岑参の「行軍九日長安の故園を思う」

報告：花岡風子

今回のお題は李白の『峨眉山月の歌』です。李白はこれまでもう何度も取り上げられていますが、改めて生い立ちを振り返りますと、旧説では、701年に四川省で生まれたということになっていました。母が太白星を踏んだ夢を見たあと身籠ったとのことで、字を太白あざな たいはくといいます。太白とは金星のことです。金星とは夜空に輝く一つ星。まるで李白の生涯そのものを表しているかのようですね。若い頃から任侠に憧れて剣術に励んだり、仙人を志して道教を学んだり、自由奔放な暮らしをしていました。

但しその生い立ちについては、不明な点が多いようです。一説によると、父親は西域地方を往来する商人で、李白の生地は西域の碎葉スイアブ（今のキルギス共和国辺り）であったそうで、最近ではこれが通説となっています。だとすれば、あるいは李白には異民族の血が流れていたのかもしれない。「李白はどこか中国人離れしたところがありますね。常に夢とロマンを追い求め、堅苦しい礼節を嫌い、皇帝の面前も憚らず酒を喰らって傍若無人のふるまいをするなど、普通の中国人にはあり得ませんね」と植田先生。確かに、李白は玄宗皇帝の前でベロンベロンに酔っ払って詩を書くこともあったようで、映画の一シーンにもなっています。しかし、李白のそんな天衣無縫さを玄宗皇帝は愛します。先祖が北方民族の血を引くとされる玄宗皇帝も、或いは同じような性格の持ち主だったのでしょうか。自分の中にある夢とロマンを李白の生きざまに重ねていたのかもしれないですね。玄宗皇帝がもし皇帝でなければ、人間味豊かな芸術家になっていたかも？ ところが幸か不幸か、玄宗は皇帝でした。そしてこの二人の関係が一年余りで終わりを告げたのは、歴史の示す通りです。

さて、この詩でも月が取り上げられていますが、李白はとても月が好きで、月を読み込んだ作品が数多くあります。「池に映った月を取ろうとして、池の中に落ちて死んだとも伝えられています。まあ、そ

れはないでしょうけれど、それがまことしやかに語り継がれているのも李白の魅力を物語っていますね」と植田先生。

é méi shān yuè gē
峨眉山月歌

é méi shān yuè bàn lún qiū
峨眉山月半輪秋
yǐng rù píng qiāng jiāng shuǐ liú
影入平羌江水流
yè fā qīng xī xiàng sān xiá
夜發清溪向三峽
sī jūn bù jiàn xià yú zhōu
思君不見下渝州

峨眉山月の歌

é méi shān yuè bàn lún qiū
峨眉山月半輪はんりん あきの秋
yǐng rù píng qiāng jiāng shuǐ liú
影は平羌江の水に入りて流るなが
yè fā qīng xī xiàng sān xiá
夜清溪を發して三峽に向かう
sī jūn bù jiàn xià yú zhōu
君を思えど見えず渝州ゆしゅう くだに下る

これは李白が25歳にして初めて故郷を離れ、中央に出るときの詩です。「峨眉山」「平羌江」「清溪」「三峽」「渝州」と四川地方の地名が並んでいますが、「ここには、慣れ親しんだ故郷を後にする若者の未練心と未来への期待感が、複雑に入り混じって行間に見え隠れしているようですね」と植田先生。なるほど、観光案内ではないんですね。

一句目は秋の峨眉山に半月が掛かっているとのことですが、李白がこの詩を詠んだ頃と当時の暦を調べ上げると、満月だったそうで、なぜ満月なのに敢えて「半輪」としたのかと疑問を呈する人が今もいるそうです。植田先生曰く「マニアックというか…でもそれだけ李白の詩には、人の心をひきつけて離さないものがあるということでしょうか」。マニアックな人というのはいつの時代にもいますが、好きなものに対する飽くことを知らない執着と情熱に

は驚かされますね。李白が満月を見ていたはずなのに、敢えて詩に「半輪」と書いたのは何故なのかを追及するなんて、普通の人間には出来ないことです(笑)。

「詩仙」と称され、その作品は神品と評価されるほど李白は超越した魅力を保ちつつ、こうして今なお後人たちに愛され続けているわけです。

大酒飲みで女好き。ちょっとアウトロー的なところもある李白は、飄逸自在に複雑な時代を生き抜きました。これまで鑑賞してきたどの作品にも、他の詩人には見られない独特の魅力が感じられます。その着想と表現技術は、さながら李白マジックとでも言えるかもしれませんね。

この作品も、峨眉山下で秋の夜空に浮かぶ上弦の月を見上げていたかと思うと、二句目は一転して平羌江(今の青衣江)の川面に視点を変え、流水と共に流れる月影を見下ろすシーンに移ります。そして三句目には夜更けに清溪の港を発ち、三峡に向かう作者の旅姿が映し出されます。ここでいう三峡とは、今は三峡ダムとなって姿を消したかつての名勝地が思い起こされますが、一説には、青衣江下流にも小三峡と呼ばれる場所があるそうで、ここではそれを指すとも言われています。

そして、最後の一句に「君を思えど見えず、渝州(今の重慶市)に下る」とありますが、いよいよ故郷を離れる時に思う「君」とは一体誰のことなんでしょうね。諸説ありますが、かねてより見慣れた峨眉山の月そのものを擬人化したとも、親しかった友人を指すとも言われています。また、故郷に残した恋人であるという説もあります。だとすれば「一輪」(満月)でなく「半輪」(半月)という一語が妙に切実感をもって迫ってきますね。この最後の一句も様々な妄想?をかきたててやみません。

植田先生から作者と作品についてのお話を十分に伺ってから、一同ひたすら音読の世界に浸りました。この詩は規則通りに作られていて、大変読みやすく、一句目、二句目、四句目のそれぞれ最後の字で韻を踏んでいます。秋 qiū 流 liú、州 zhōu と中国語の

音で押韻の美しさを堪能でき、詩の背景をとくと心に刻みながら声に出せるのも、このクラスの醍醐味なのです。

二首目は岑参(715年~770年)の「行軍九日長安の故園を思う」という五言絶句でした。岑参は、杜甫より3歳、李白とは14歳年下です。どちらとも親交があり、杜甫とは特に親交が深かったようです。744年に科挙に合格して進士となります。その後、節度使(軍事を司る地方長官)の幕僚となり、長く西域での従軍生活を経験し、その関係から「辺塞詩」を得意としていました。

辺塞詩とは戦勝の喜びや戦場の悲惨さ、兵士たちの望郷の念等を詠った、いわば流行歌のようなもので、必ずしも現地体験に基づいて作られたものではありません。また、この時代に流行したものとしては、他に「閨怨詩」というのもありました。寵愛を失った女性の恨みを綴ったものです。中には夫や恋人を戦地に取られた女性が、ひとり寝の寂しさを怨んだ詩などもありました。多くは不遇をかこつ男性たちが、世の不合理的を訴えるために、その心情を兵士や女性の嘆きに託して綴ったものです。「まあ、いわばカラオケで演歌を歌って憂さを晴らすようなのですかね」と植田先生。しかしその中から、古典として歌い継がれる名作も数多く生まれたのです。

一方、中には実際の従軍体験に基づいて作られたものもあります。岑参の辺塞詩はその一例です。岑参は実際に参謀として辺境の地に赴いた経験を持っているので、「彼の作品は現地に行かなければ書けないようなものになっています」と植田先生。

xíng jūn jiǔ rì sī cháng ān gù yuán
行 军 九 日 思 长 安 故 园

cén shēn
岑 参

qiǎng yù dēng gāo qù
强 欲 登 高 去
wú rén sòng jiǔ lái
无 人 送 酒 来
yáo lián gù yuán jú
遥 怜 故 园 菊
yīng bǎng zhàn chǎng kāi
应 榜 战 场 开

行軍九日長安の故園を思う

強^しいて 高^ゆきに登り去かんと欲するも

人の酒を送る無し

遙かに憐れむ故園の菊

応^{まさ}に戦場^そに傍^そいて開くべし

この詩を書いたのは至徳二年（757）。当時、岑参は安祿山軍によって占拠されていた長安を奪回する戦いに従軍していました。九日とは九月九日の重陽の節句のことで、その日に長安の故郷を偲んで書いたものだそうです。このとき岑参は、命がけで長安を脱出して肅宗のもとに駆けつけた杜甫と共に、鳳翔^{ほうしょう}の行在所に居たのです。旧暦の九月九日は、現代の暦の10月中旬に当たりますが、この日は菊花節ともいわれ、高いところに登って、酒に菊を浮かべて飲み、遠く離れたところにいる親族を偲ぶ習慣があったのだそうです。

一句目では、従軍中ではあるけれど、強いて高いところに登って菊酒を飲んで、故郷や家族に想いを馳せようとしたことを述べ、二句目で「しかし誰も酒を送ってこない」と続きます。「人の酒を送る無し」の一句は、その昔、重陽の節句に同じく酒がないと嘆いていた陶淵明に酒が送られてきたという故事（『南史』隠逸伝）に基づいています。あの時の陶淵明には酒が送られてきたというが、こんな僻地には誰も酒など送ってこない。この一、二句に、従軍生活の苦しさとともに、当面する時代の厳しさが、それとなく表現されています。

三句目では視点がガラリと変わります。三句目の「遙かに憐れむ故園の菊」とは、はるか遠く都長安で寂しく咲いているであろう可憐な菊をいつくしむ様です。この一句には、望郷の念と共に、無残にも踏みじられた都の人々の生活を想う心がにじみ出ています。

菊と言えば秋を象徴する花で、菊には邪気を払う力があるとされ、重陽の節句には、邪気払いの菊酒

を飲むのだそうです。そういえば、私の子供の頃、お正月に大人たちが嗜んでいた花札の絵柄に菊とお酒があったのを思い出しました。

花札の菊と酒が中国から来たかどうかは分かりませんが、この菊酒を飲む習慣は日本にも確かに伝わっていたようです。でも今では一部の地域を除いてほとんど廃れていますね。とはいえ食用菊はごく一般に販売されていますし、アラフォー女子はこれを聞いて、今度こそ菊をお酒に浮かべて飲んでみたいとひそかに思いました次第（笑）。

さて、最後の句、「応に戦場に傍いて開くべし」とありますが、この文の主語は菊の花です。「応」とは、きっと～だろう、～のはずだという意味で、「傍」は、ここでは近くに寄り添うという意味の動詞です。戦地と化した都長安の道端に寄り添うように、ひっそりと咲く菊の花を思い浮かべているのです。

ところで一般の「辺塞詩」とこの詩の異なる所は、都に居て戦場を想うのではなく、辺境の地に在って、戦場と化した都を想うという点です。「もしこれをも辺塞詩とみなすならば、実体験者でないと書けない辺塞詩ですね」と植田先生。

この前年、杜甫はあの有名な『春望』を詠み、華やかかなりし長安の都の荒れ果てたさまを目の当たりにして嘆きますが、こういう詩を読みますと、今の時代がいかにか幸せかと思わずにられません。

岑参はまた、南宋の大詩人陸游に熱愛されたようですが、どちらも気骨のある軍人である一方、戦地でのやるせない気持ちもこうして詩に残されているからこそ、時代を越えて共感したのでしょう。歴史の教科書のように、過去の出来事をただ年代順に羅列するだけでなく、漢詩は、当時の生身の詩人たちがその生涯を通して体験し、その目を通して観た生々しい時代の記録でもあります。

今の時代では想像もつかない苦難の時代があったことを後世に伝える、素晴らしい手段の一つだと思えてなりません。